

西郊民俗

第二六八号

令和六年（二〇二四）九月

日本地名学研究所（前身、大和地名研究所）と柳田国男 前篇一	
― 柳田国男と研究所との交流はいつから ―	中葉博文 1
コロコロの響き	板橋春夫 16
― 飯島康夫氏の最終講義を聴いて ―	
アイヌ口承話者である白沢ナベのウエペケレ「カラスの恩返し」に関する考察	
― 対照性を好む心性の視点から ―	大喜多紀明 18
雑報	24

西郊民俗談話会

西郊民俗談話会会則

- 一、本会は西郊民俗談話会と称する。
- 二、本会は会員相互の連絡を保ちながら、民俗学の研究を推進することを目的とする。
- 三、本会は、次の事業を行う。
 - (1) 会誌『西郊民俗』等の発行。
 - (2) 研究会等の開催。
 - (3) その他。
- 四、本会の会員は本会の目的に賛同して入会の手続をとったものとする。
- 五、本会の会員は会費として年額二、〇〇〇円を納入するものとする。
- 六、本会は会務の執行のために委員若干名を置き、うち一名を代表委員とする。委員の選出は総会において行い、その任期は二年とする。
- 七、本会は必要に応じて顧問を置くことができる。
- 八、本会は少くとも毎年一回の総会を開催するものとする。
- 九、この会則の変更は総会の決議による。

『西郊民俗』投稿案内

『西郊民俗』は年四回(三・六・九・十二月)に刊行しています。本会会員であれば、どなたでも投稿することができます。民俗学に関する報告・論説・記事であれば、いかなる地域のものでもかまいません。論考・調査報告・資料紹介・資料翻刻・問題提起等、原稿の長短に関わらずお寄せください。短報も受け付けています。

投稿に際して次の点に留意してください。

一、投稿方法

原稿はできるだけ電子データ原稿をお願いします。本文・写真・図

表を収録したCD・メモリースティック等のデータメディアの郵送、またはEメール送信でお送り下さい。そのプリント紙を郵送して下さい。Eメール送信の場合でも、プリント紙は郵送して下さい。もちろん手書き原稿も受け付けています。

二、写真・図等

写真・図等は、電子データの本文に貼り付けしないで、写真・図一点ごとの別ファイルにしてください。本文に貼り付けると、データが小さくなり印刷に適しません。

三、校正

執筆者校正は、初校紙を郵送しますので、修正して返送して下さい。執筆者校正は初校のみといたします。注の付け方、文法・文意の整理等、本文の体裁について、編集上の調整をする場合があります。

四、『西郊民俗』PDFのインターネット公開

二五八号から、西郊民俗談話会のホームページにおいて、会誌の発行後一年を経過した時に、PDFによるインターネット公開を行います。今後の投稿に際して、インターネット公開を了承した上での投稿をお願いします。既刊のバックナンバーのインターネット公開については、今後検討していきます。

五、原稿送り先 会誌編集担当

久野俊彦 〒329-0433 栃木県下野市緑四一六七七

Eメール htotsano@yahoo.co.jp

『西郊民俗』バックナンバー案内

既刊分の会誌の販売価格は一部五〇〇円です。在庫分は二四九号から受け付けています。会務担当宛お申し込み下さい。

日本地名学研究所（前身、大和地名研究所）と柳田国男 前篇一

―柳田国男と研究所との交流はいつから―

中 葉 博 文

はじめに

日本地名学研究所は、地名を扱う一民間の地名研究機関である。柳田国男は「地名の研究」を行った民俗学者である。柳田は、日本民俗学の創始者といわれ、自らの一生を回顧した聞き書き『故郷七十年』という著書を残し、この書の「私の学問」を語る中で、「∴地名の研究は、どうしても地理学と提携しなければ出来ないことである。近ごろやると日本地名学研究所というのができて、本も出るようになった。」と述べている。⁽¹⁾ここに記された「日本地名学研究所」を主宰した初代所長は中野文彦で、後に二代目の所長になったのが池田末則である。

筆者は、生前、中野文彦とも会い教示を受け、また、池田末則には直接教示・指導を受け、終生、師事した。我が師匠である。

生前、池田が私によく「柳田国男先生の『地名の研究』（初版・改版）を読みなさい。」「研究所と柳田先生とは昔から関係がある。」といていた。

柳田・中野は明治から昭和期、池田は大正から平成期までにおいて、日本の「地名研究」を牽引した三人である。

現在、日本地名学研究所は休所状態である。筆者は、「日本地名学研究所」に、直接関わった一人として、筆者が、生前、池田・中野から直接聞いたことや、池田を介して直接教示・指導を受けた人々たちから筆者が聞いたこと、そして、筆者が池田から遺品として受け継いだ写真・文

献等や、また、柳田・中野・池田のことが載る文献等を資料とすることができる。本稿では、それらを手がかりに、日本地名学研究所の前身である大和地名研究所創設の時まで遡って、この三人が、いつ頃からどのような経緯で交流が始まったのか、また、その頃の日本の「地名研究」の状況は、どうだったのか、日本地名学研究所の前身である大和地名研究所の頃を中心に、私見を述べてみたいと思う。⁽²⁾

一 柳田国男の『故郷七十年』と研究所の学術雑誌『地名学研究』の発行年月日

柳田が自らの一生を回顧した聞き書き『故郷七十年』は、昭和三十三年（一九五七）十二月から翌年（一九五八）三月にかけて、柳田が語ったものを、神戸新聞が創立六十周年記念として、昭和三十三年一月九日の第一回から、同年九月十四日まで二百回連載された。

連載後、神戸の「のじぎく文庫」から単行本『故郷七十年』として、昭和三十四年十一月十五日印刷・同年十一月二十日に発行された。⁽³⁾

柳田は、昭和三十二年十二月から翌年の三月の連載時、さらには、単行本の中で「∴近ごろやると日本地名学研究所というのができて、本も出るようになった。」と書き記された文言と、同単行本が印刷・発行された年月の昭和三十四年十一月から、柳田は、昭和三十二・三・四年には「日本地名学研究所」の存在と、同研究所から出版物が発刊されていることも承知していた。

かつて日本地名学研究所では、学術雑誌『地名学研究』を発行していた。⁽⁴⁾同雑誌の第二號に、「巻頭」として、「地名研究の御雑誌昔のよしみにて小生にまで御送忝く存じ候此頃は久しく注意を怠りをり候も沖繩群島の言語をしらべ居り候ときいろいろ心当り有之そのうち小文を試み御掲載を乞ふべく存し居候御礼まで 四月二十九日 柳田國男」と、

柳田が記した書簡が載っている。『同』第二號は、昭和三十二年六月二十五日印刷、発行が同年六月三十日である。

柳田からの書簡に記されていた四月二十九日の日付から、『同』第二號発行前に、柳田から当時の研究所（中野のもと）へ届いた書簡である。

『同』第二號の前号（創刊号）は、昭和三十二年三月二十五日に印刷され、同月三十一日に発行されている。柳田の書簡に記される日付から、『同』第二號に載る柳田の「巻頭（書簡）」は、研究所（中野）から柳田に『同』創刊号を惠贈した、そのお礼として柳田から届いた書簡である。⁽⁵⁾

当時、日本地名学研究所では、「地名学研究会」という研究会を組織し、事務所を同研究所内に置き、同会の学術機関誌として『地名学研究』の発行を行い、その後、同研究所では地名関係学術書、資料等の出版事業も行おうとしていた頃であった。⁽⁶⁾

ちなみに、『同』第二號の巻末には、昭和三十二年五月末現在の記載で、当時の「会員並びに協賛者名簿」が載っている。

そこに、柳田国男の名が見える。他に、新村出、金田一京助、宮本常一、知里真志保、桜田勝徳、沢田四郎作、笹谷良造、水木直箭、岸田定雄、田村吉永、森口奈良吉、植栗与門、仲川明、平山敏治郎、戸川安章、山口弥一郎、鏡味完二、辻村太郎など、柳田が交友したと思われる民俗学をはじめ、言語学・地理学など他分野の研究者らの名が見える。⁽⁷⁾

当時の地名学研究会の「規約」の中に「本会の主旨に賛成し、機関誌購読料（年額五百円）の納入者を以て会員とする。」という一文がある。

柳田の「巻頭（書簡）」が載る『同』第二號は、柳田は一会員として研究所から受け取ったと考えられる。

昭和三十二年三月印刷・発行の『同』創刊号の編集後記に、中野は「○本誌発刊にあたり学界の耆宿柳田国男、新村出両先生に御報告し、

御高見を御伺いしたいと思ったのであるが、何分にも御高齢であり、且つ厳寒の季節でもあったので、御遠慮申し上げた。いずれ創刊号を御眼にかけて、御注言をいただきたいと思っている。」と記している。この文から、当時、中野（や池田）は、『同』創刊号を、直接、柳田に会って渡し、発刊等をご報告し、ご高見を賜ろうしていたが、色々な配慮から（昭和三十二年三月か二月に直接面会するというのを）断念し、その後、柳田に送付（惠贈）したことが読み取れる。

では、柳田は、中野・池田の日本地名学研究所と、いつ頃から交流をしていたのか、『同』第二號の「巻頭」に載る柳田の書簡に、「地名研究の御雑誌昔のよしみにて小生にまで御送……。」と見える。「昔のよしみ」という文言からもわかるように「以前」からということになるが、具体的にいつ頃からか。

『同』創刊号の編集後記で、中野は、また「……○昭和十七年創立の大和地名研究所（奈良県）を發展せしめて日本地名学研究所と改称しました。」と記している。

柳田は、日本地名学研究所の前身が大和地名研究所（奈良県）であることも周知していたと思われる。

では、いつ頃から柳田と中野・池田との交流が始まったのか。

二 日本地名学研究所の前身、大和地名研究所とは―中野文彦と池田末則

（一）中野文彦と池田末則との出会い

そもそも中野文彦、池田末則とは、どんな人物か。中野は明治三十六年に生まれ、昭和五年に京都大学文学部国文学科を卒業した。在学中、中野は、生涯柳田と親交した同大教授だった新村出から言語学や方言学を学んだ。中野は和歌を専攻したことから、当時、同大助教授だった澤

瀉久孝に指導を受け、その頃、人のやらない和歌集、『風葉和歌集』に取り組み、卒業の際に『風葉和歌集』底本の校合に苦心しながら、膨大な資料を提出し、国文学教室の教官らを驚かしたという。⁽⁸⁾

その後（卒業後）、篤学中野は、当時、奈良県南葛城郡吐田郷村（現在の奈良県御所市）に住み、家業である林業（素封家）の傍ら、大学時代に専攻した国文学の「和歌研究」をはじめ、さらに、方言学・地理学・民俗学など学際的な立場から比較研究の方法論を模索しながら、家業の林業にも関係する「山林語彙」「地形語彙」などの語彙研究も行っていった。⁽¹⁰⁾

中野は、この一定の範囲に用いられる語「語彙研究」は、言わば、土地の名称「地名」「地名語彙」である。だから、土地のことを知るには「地名の研究」が、大変、重要であると日に日に痛感し、本格的に「地名の研究」を創めたいと思うようになっていった。

一方、池田は大正十一年、南葛城郡御所町（現在の奈良県御所市）に生まれ、十代の頃から『日本書紀』『古事記』『万葉集』『風土記』などの上代文学に親しんだ。これら書物に見られる古代地名に興味をもち、中でも、特に地名の転訛・用字の問題に関心を抱いた。昭和十四年頃、池田は、当時自宅のあった奈良県南葛城郡と大阪府の境に聳える金剛山中の「元禄水論」の調査中で、謄写版刷による地名に関する論文「金剛山水論史」を発表していた。この調査から池田は地名調査や研究する面白さ、地名の大切さを知った。⁽¹²⁾この「元禄水論」の調査をしている時に、田村吉永や土井實と出会い、二人から教示を受けた。

翌十五年春、（中野もよく知る田村・土井の推薦・紹介から）池田、十八歳の時、中野から「地名の研究を、さらに進めて見ないか。」と声をかけられた。

中野は、池田と出会った半年後、同十五年の秋あたりから、池田に奈

良県内各市町村にある土地台帳に載る小字地名収集の实地調査をしたらどうかと伝えた。

池田は、中野からの教示により、手始めに、当時の池田の地元、南葛城郡御所町や中野の住む同郡吐田郷村の町村役場に赴き、土地台帳などの関係書類を閲覧した。丹念に小字等を記録し、また地籍実測図の複写作業も同時に行った。この作業を終えたら、次に、池田は、対象とした現地に赴き、土地台帳から書き写した小字名一つひとつの呼称法及び俗称地名の採集も同時並行で地道に収集作業に着手し始めた。

中野は、池田に声をかけた翌十六年に「地名学」の名を打ち立て、私財を投じ、自らの中野邸内の別館を、「地名研究」を行う拠点（研究所）にしようと創設準備を進めた。池田は、中野からの教示を受けながら小地名調査を行い、自らの郷土史研究にも小地名を活かしながら、その頃、自著『葛城郷土史』や『高取城跡の研究』をまとめた。⁽¹³⁾

（二）中野文彦が「地名研究所」を創設しようと思いついた動機

中野文彦は、学生時代から無類の読書家であり、卒業時に、人のやらない『風葉和歌集』底本の校合に苦心しながら、卒業論文をまとめ（まとめは膨大な資料）提出し、当時の国文学教室の新村出、澤瀉久孝らを驚かしたという。中野は、昭和五年に大学を卒業した後も、家業である林業の傍ら、無類の読書家、篤学な研究意欲は衰えることなく、むしろ高まった。

中野は、和歌研究をはじめ、家業の林業にも関係する「山林語彙」「地形語彙」などの語彙研究にも興味関心がさらに深まった。

大日本山林会の機関誌『山林』に柳田が連載していた「山林語彙」に関することをまとめた『山村語彙』が、昭和七年に大日本山林会から刊行され、さらに、同九年には、柳田は『山林』誌上に、「山林語彙続編」を連載し、同十年に『山村語彙続編』として、同じ大日本山林会か

ら刊行された。

中野は、この大日本山林会から刊行された『山村語彙』『山村語彙続編』の二冊が、語彙研究の要因となったと、筆者はかつて池田末則から聞いたことがある。

柳田は、昭和九年前後、大日本山林会の機関誌『山林』に「山村語彙」「山村語彙続編」を連載した。この連載と並行して、柳田は、自ら主宰する木曜会のメンバーを中心に、同年四月、柳田の指導のもと、「郷土生活研究所」を組織し、日本学術振興会の補助をうけて「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査」いわゆる山村調査を、同年五月より三年がかりで、全国の山村、五十二カ所を調査した。⁽¹⁴⁾

左記の中野の論説に載る倉田（二郎）も、この一連の山村調査に参加した一人である。後に中野は、その成果として柳田と共に収録編纂した『分類山村語彙』（柳田と倉田共編、昭和十六年、信濃教育会）を見て、大和に「地名研究所」を、ぜひ、創設したいと思いついたきっかけの一つが、この冊子であった。

中野は、地名研究所創設後、数年経って大和国史会の機関誌『大和志』（昭和十九年三月二十五日号）に、論説「吉野山林語彙」を発表している。この論説の中で、「…身を山林の業に十餘年、常に東吉野の山林に往来し、その純朴の古風に接し、古俗に接し、古言を聞き、時に録してひそかに楽しみとしてゐた。まのあたりに見た、山に生れ山に死ぬる人々の信仰のきびしさ、慣習のほゝましさ、まことに上代さながらの倅さへ偲ばれて棄て難いものがある。頃日、柳田倉田兩氏御編纂の『分類山村語彙』を見て、我が吉野の語彙のあまりにも寥々たるに驚いてゐた。従来適當なる報告者のなかつた爲であらう。即ち古帳を出して假に編次をなし、同好の士に呈する所以である。尤も旅行者の手記を出でないもの、誤記謬見もあること、思ふ。偏に先覺諸氏の御叱正を得て、

完全なものにして行き度いと念じてゐる。」と記している。⁽¹⁵⁾

中野が投稿した大和国史会とは、昭和六年創設された会で、初代会長は阪本猷で、会の事務所は田村吉永方だった。初代会長の阪本は、当時、中野と同じ林業の素封家で、阪本は他に電気商会も経営する実業家でもあった。阪本は明治二十四年、奈良県吉野郡龍門村に生まれた。事務を担当した田村は、明治二十六年、同郡白銀村に生まれた。同郷（同郡）で互いに歳も近く、阪本は実業家、田村は奈良師範学校（現奈良教育大学）を卒業後、田村の地元、吉野郡、宇智郡をはじめ奈良県内で中学校の教員をし、二人は畑違いの職ではあったが、気心の知れた旧知だった。同会を創設した時、田村は同県生駒郡山町柳町に住んでいた。田村の居を同会の事務所とし、同会の機関誌『大和志』は、三年後の昭和九年十月一日に創刊号が発刊され、終刊まで田村が編纂兼及び発行者となり、大和の国史に関することを発信した。この会を通して、大和の国史に関することも多く明らかとなり、同好の人たちの交流も盛んとなり、多くの研究者も輩出した。

中野は、阪本・田村のことは、昭和六年に同会を創設する前から知り、中野は早い段階で同会の会員となった。

中野は、地理学関係の本を発行してきた古今書院から、昭和十一年一月十八日に発刊された柳田国男著『地名の研究』を早々に読んだ。同十五年春、池田と出会って、数日経ったとある日、中野は池田に『同書』を読みなさいと渡している。『同書』の「序」は柳田国男、「あとがき」は、柳田の木曜会の同人だった地理学者の山口貞夫が書き、『同書』は、柳田の快諾を得て、山口が柳田の地名に関する論文や講演記録を編輯し、校正、索引作製をすべて自ら行ったものである。『同書』の「地名考説」は、地名学徒のことを考えて、地名解釈に関する論文を山口が集めたものである。中野も池田も、何度も何度も『同書』を読んだことを、

筆者は、生前、池田から直接聞いた。また、池田は、地名解釈をするには、根拠となる小地名を多く集めねばならない、「中野先生が、（同十五年秋あたり）土地台帳に載る小字地名収集の実地調査をしたらどうか」と、言ったことが『同書』を何度も読んだことで理解でき、実地調査に身が入ったきっかけにもなった一冊だったとも言っていた。¹⁶

同十六年、中野は「地名研究所」創設にあたって、どのように協力・支援を得たらよいか、中野は多くの人と会い、（時には池田も同席して）多くの助言ももらったという。中でも、田村吉永、土井實、堀江彦三郎らと、個々によく会い、中野が創設懇談会に招待する人選も三人に相談し、中野は（時には池田も同行して）、皆々ならぬ研究所創設への強い思いと信念で協力・支援を仰ぐ¹⁷と、招待する人たちのところへ、事前に個々に訪ねもしたという。

三 柳田国男と日本地名学研究所の前身、大和地名研究所とは

（一）研究所創設懇談会の顔ぶれ

中野文彦は、昭和十七年三月十三日に、正式に地名研究所を創設するための懇談会を奈良市で開催した。この会合には、歴史学・民俗学・郷土史などに造詣の深い池田源太、堀江彦三郎、永島福太郎、高田十郎、野村伝四、水木直箭、岸田定雄、山本賢三、田村吉永らを中野が招待した。中野は池田末則とともに会（約十名出席）を運営した。中野は、この会を「大和の地名研究に関する懇談会」と銘打って開いた。中野は、「大和の地名研究」の土台となる小地名（小字名・俗称地名）の収集及び呼称や地籍実測図の複写作業を、池田末則を通して着手し始めたことを説明し、池田本人をこの会で紹介した。

中野は「これから本格的に地名の研究を、研究所を創設して進めたいので、ぜひ支援・協力してほしい。」と招待者に自らの思いや信念を伝

えた。そして、二十年計画で、小地名調査をはじめ、これから研究所の行おうとする事業内容を説明した。中野の目算で大和の小地名は約二十万である。

中野は、学生の頃から多くの地名に関する文献も読んでいた。明治期に内務省地理局が明治十年代に各府県に対して、小字の記録提出を命じ、膨大な地名集を集め、内閣文庫に保管され、その後、東大図書館に保管されていた。ところがその地名集が、大正十二年の関東大震災によりすべて焼失し、全国で、その控えがごくわずか残っているということも理解していた。また、中野は、明治末期からの柳田国男による民俗学的研究のなかで、小字などの小地名から本格的な地名考察を行ない、地名を集落の発達史を語るものとして重視した。さらに、中野は、土地利用のなかで、地名がどう名づけられ、どう発達するかに注目し、柳田が資料とした小地名の収集を地道に行おうとした。小地名の収集で、その土地のことを知ることができ、しかも、小字、俗称などの小地名を、多く集めれば集めるほど、多くの資料（地名）から科学的に比較研究することができ、地名からその土地のことをより正確に知ることができると、中野は考えた。

中野は、柳田が『地名の研究』（古今書院 昭和十一年発行）で「私はおかしいほどたくさんのお金をかけている：結局のところは、地名研究の発達を助ける手段として、各地在住者の今後の採集（地名）を期待するほかはない」と、言ったこのことを、池田とともに大和（奈良）で実践し「カタチ」にする。

この行動が、当時の日本の地名研究の方向性を確認し、これからの日本の地名研究の進むべき方向性も明らかにできると確信し、招待者を招き「大和の地名研究に関する懇談会」を開催したのだと思う。

招待者の一人田村は、自ら編集する大和国史会の機関誌『大和志』

(同十七年四月一日発行号)の「編集後記」に、「三月十三日南葛城郡吐田郷村の篤学中野文彦氏の招待によって大和地名研究に關する懇談會があった、…双手をあげて本會としても出来る限りの協力をしてゆき度と思ふ。何れその報告書等も今後の誌上を飾る事とならうが、その採集等については具體的な方策を定めて廣く會員諸賢の御協力を願ひ度と思ふ。」と、この会合のことを書いている。田村は、会として中野の創設する研究所への支援・協力をしようとした。また、中野(研究所)の成果(報告書等)も、何れ『同』誌を飾るだろうとも記している。⁽¹⁸⁾

(二) 中野・池田の交友關係と柳田国男の奈良での知合い

① 中野・池田の良き相談者―田村・土井・堀江

中野が、研究所創設懇談会(大和の地名研究に關する懇談会)に招待したメンバーを、どのようにして人選し決まったのか少し述べてみたいと思う。

中野は、前記のように、田村吉永⁽¹⁹⁾、土井實⁽²⁰⁾、堀江彦三郎⁽²¹⁾らと、個々によく会い、(時には池田も同行し、同席もし)この三人から人選を行うための情報や助言をもらいながら中野が創設懇談会に招待する人たちを決めた。

その前に、中野と田村・土井・堀江との個々の間柄を述べたい。まずは、中野は、田村とは同業者であり、素封家である阪本猷を古くから良く知り、阪本を通して田村を知り、早い段階で田村が主宰する大和国史会の会員にもなる。中野は、土井とは田村を通して昭和十年前後に知る。堀江彦三郎とは、池田が、堀江と同郷(北葛城郡)であり歯科医であり郷土史家ということで、日頃から池田が公私にわたって親しくし、中野も古くから堀江のことを知り、この懇談会に招待した中で、田村と共にたいへん親しくしていた。田村と土井は、共に大和の国史・郷土史を研究する教職・行政職に就くもの同士で、公私に亘って古くから親しい間

柄だった。田村が主宰した大和国史会に、土井も早い段階で会員となる。

土井は、大阪生まれではあるが、大和の各地を歩き出したのが、大正十五年ごろ「大和古代の市」を調べるきっかけで、昭和二年に奈良に定住してから、さらにあちこち歩きまわり、市の研究もまとなり、今度には後に自らの職業にも関わった大和の美術や文化財に興味をもつようになった。また、土井は、土井の父と親交があった『大日本金石史』の著者の木崎愛吉の影響から、小学生の頃から金石文に自然と親しんでいた。奈良に定住し数年経った頃から、土井は本格的に金石文の研究にも邁進していく。土井は、田村と出合い、この頃、高田十郎⁽²²⁾とも出合い、金石文に關することを高田から教示してもらい、高田との親交も深まっていた。土井は、創設懇談会には出席してはいないが、中野の同会開催に向けて、田村とともに多くの人を結びつけた。土井は影の立役者だった。

永島福太郎⁽²³⁾は、國學院大学に在学中から奈良に関心を寄せ、卒業後、東京大学史料編纂所員を経て、旧制奈良県立奈良中学校教諭となった。その頃中野と永島は出会った。大和の郷土史研究の草分け的存在だった保井芳太郎が、田村吉永や高田十郎とも交流し、大正十二年に設立した大和史学会が、昭和十五年七月に刊行された「保井家古文書目録」や昭和十七年四月に刊行された奈良県図書館協会の「大和古文書聚英」などの編さんに永島が関わり、当時、大和史学会の幹事をしていた高田十郎や奈良県立図書館長の野村伝四⁽²⁴⁾から永島を紹介され、以後、親しく交流することとなる。中野は、同館長の野村とは、それ以前から親交があった。

野村は、明治十三年、鹿児島県肝属郡高山町に生まれ、同三十九年に東京帝国大学文学部英文科を卒業した。在学中、夏目漱石に教えを受け、いわば漱石の門下にあたり『漱石全集』の日記編などに野村のことが記

録されている。野村は、卒業後、佐賀・愛知県や大阪府の各中学校で英語教師をし、大正十年に、奈良県の桜井高等女学校の校長に赴任し、その後、昭和三年には、旧制奈良県立五條中学校の校長を歴任し、同十年六月に奈良県立図書館長に就任し、同十七年四月まで在勤した。その間、奈良県読書会の会長として、毎回読書会に県内外の有識者を招き、読書の振興・普及にも努めた。⁽²⁵⁾ 中野と野村とは、いつ頃出合い、親しく交流するようになったか。生前、筆者は池田より、野村と中野そして末則との出合いについて聞いたことがある。中野は、野村が五條中学校の校長をしていた同八、九年頃からの知り合いだったといっていた。

池田源太は、明治三十二年大分県宇佐市に生まれ、昭和七年京都大学文学部国史専攻科卒業、在学中は、西田直二郎に師事した。卒業後は、京都一商、京都一中、龍谷大学を経て、同十六年末に同大学講師から転出し、創設懇談会開催時は、檀原道場・檀原文庫主事だった。池田源太は、同主事に着任して間もなく、朝日新聞檀原通信局長の小川砂から池田末則を紹介され、末則と会い、末則の人柄や研究姿勢を知った。末則は源太と会ったことを中野に話し、数日たって、中野と末則は、源太を訪ね、源太は中野・末則が取り組んでいる地名研究に対する姿勢や地名研究の重要性に共感し、以後、源太は地名に関心を寄せることとなる。

山本賢三は、当時、池田が住む北葛城郡御所町に住み、池田を幼い頃から知り、文化財に関することに造詣が深かった。土井も仕事柄、山本とも親交があり、中野が創設懇談会に招待した。山本は、その後、岩手県花巻市に転任するが、池田や中野の研究活動を支援した。⁽²⁷⁾

② 筆者が、直接、教示・指導を受けた師匠・恩師―中野・池田末則・土井・池田源太・永島・堀江

筆者は、前記した中野文彦、池田末則、池田源太、土井實、永島福太郎、堀江彦三郎とは、生前、直接会ひ、教示あるいは指導を受けた尊敬

できる師匠や恩師らである。

この六人が異口同音、筆者に言った言葉（一文）がある。それは「中葉君、柳田国男先生の『地名の研究』を読んだか、読んだことがあるか。」だった。

いずれの先生にも読んだことがあると答えた。地名の研究を本格的にするのであれば、必ず一読しなければならない一冊だと言われた。

また、中野文彦と池田末則からは、「中葉君、しかも、柳田先生の著書『地名の研究』の初版（昭和十一年発行）・改版本（昭和二十二年発行）や、改版本でも追加編集した本（昭和三十七年発行）も読んだことがあるか。」とも問われた。筆者は「高校一年の時に、角川文庫の追加編集された『和州地名談』が載る文庫本（昭和四十三年発行）を読み、高校三年の時、神田の古本屋で、古今書院からの昭和十一年発行本、昭和二十二年発行の實業之日本社版をそれぞれ買い求め、高校時代に、柳田先生の『地名の研究』の何冊かを読んだことがある。」と、中野、池田、それぞれに初めて会った頃に聞かれ、そう答えた。（個々に）二人は、「そうか、中葉君、後に『和州地名談』が追加された柳田先生の『地名の研究』本も、読んだんだ。」と、当時、二人とも「ニコッ」としていた。

二人が亡くなり、筆者は、最近になって、生前、二人が「ニコッ」とした訳が、私なりに解けた。⁽²⁸⁾ 別の機会にこのことについて述べたい。

③ 研究所創設懇談会の招待者の半数、柳田国男の奈良での知り合い
この会合に招待された池田源太、堀江彦三郎、永島福太郎、高田十郎、野村伝四、水木直箭、岸田定雄、田村吉永らは、中野も含めて、田村が主宰する大和国史会の会員だった。⁽²⁹⁾

これら招待者のうち創設懇談会開催以前から、柳田国男と交流があったのは、高田、野村、水木、岸田、田村である。

イ、柳田と交流した招待者の田村・高田と同志たち

中でも、古くから柳田と交流していたのは、田村である。田村は、大正三年八月六日、この日か次の日か、江戸時代史講演会聴講のため、上京した折に、柳田を訪ねている。その時、田村は、大和屋根のことを、柳田に話し、柳田は大和屋根に興味を持ち、そこで高田十郎の名前を聞き、柳田は高田に会いたいと思う。

高田と柳田が交流するきっかけは、それから、大正十一年七月八日、高田から柳田に音信があり、すぐに柳田は返事を出したことである。同年七月九日、柳田は高田の個人雑誌『奈良』を受け取り、高田からの依頼原稿を書き、高田と柳田との交流が始まる。

昭和に入り、二年十二月、柳田は高田に案内されて、後に「地名学研究会」の会員になる春日大社の宮司・森口奈良吉を訪ね、次第に、二人の交流が深まる。同六年四月に、柳田が関西、朝鮮、九州など一ヶ月及ぶ旅行に出た折、柳田は奈良へも行き、後述する水木直箭と奈良ホテルで会い、同ホテルから近い、紀寺の高田宅を水木と一緒に訪ねている。

翌七年十一月には、柳田は高田からの依頼で『大和の伝説』の序を書いている。同書は、教え子（後に「地名学研究会」の会員となる）仲川明との共・編著本である。同十一年一月十八日には、柳田は、奈良女子高等師範で講演をし、午後、高田が会長を務める奈良郷土会の座談会に出席している。この日、古今書院から、地理学者の山口貞夫に任せた柳田国男の『地名の研究』が発行される。印刷が一月十四日なので、柳田は高田に同本を持参し謹呈していたかもしれない。

また、座談会后、柳田は、座談会に出席した水木と、水木の義弟で、後に地名学研究会員になる笹谷良造らと共に大阪に向かう。大阪に出て、後にやはり地名学研究会員になる沢田四郎作宅で、また、後に地名学研究会員となる宮本常一ら、他にも数人の同志も交じえ、柳田を囲む大阪

民俗談話会（後に近畿民俗学会となる）の座談会が行われる。この会合では、日本民俗学二十五回連続講習会の計画の協議を夜遅くまでしたらしいという。

この会合で、この日に発行の柳田の『地名の研究』の著書について、地名の話も余談で出たかもしれない。柳田は、同十五年一月に、高田と次に述べる野村伝四の連名宛ての葉書を、二人に送っている。柳田は、同十七年一月、高田の教え子の仲川が編者の一人である『奈良叢記』に、「和州地名談」を執筆し発表した。柳田は、田村が主宰し田村が編集する大和国史会の雑誌『大和志』³⁰（昭和十六年一月一日発行）に載る野村の論考（「さらぎ考」）をヒントにした。

この二か月後の三月に、創設懇談会の会合が、中野の呼びかけで行われている。翌十八年一月には、柳田が高田の著書『随筆民話』（同年三月発行）の序文を書き、八月に入って高田が上京し、約十年ぶりに高田は柳田に直接会っている。また、同年十月、柳田は高田ら編の『大和の伝説』（増補版）の序も書いている。

柳田は、奈良での交友において、高田は大事な同志の一人として、終生、交流した。高田は、昭和二十七年に逝去した。

口、柳田と交流した招待者の野村と、野村・中野・池田末則の良き理解者・山本米三

野村と柳田の交流は、昭和六年には始まっている。同年六月に、柳田が奈良県宇智郡五條町に住む野村宛に手紙を出している。翌同七年には、柳田は野村に「方言集」をぜひまとめるようにと書いた絵葉書や葉書などを送り、同八年では五月、六月、九月に葉書や親展の手紙などを送っている。

また、柳田は、山口貞夫に任せて同十一年一月十八日に出版した『地名の研究』の「序」を、前月の同十年十二月に書いている。同月三十一

日には、柳田は野村に葉書を出している。柳田は、野村宛の葉書の文面の中に、「地名の研究」のことなども書いたのだろうか。

野村は、柳田が『地名の研究』の「序」を書いた、半年前の同十年の六月に五條中学校長から奈良県立図書館長に転任した。

その後、柳田の書簡から同十五年一月二十一日、「奈良県立図書館の野村伝四と高田十郎の連名宛てに、手紙を書く」、そして、柳田はこの年の六月十二日・七月三十日、八月九日、八月十五日、八月二十九日と頻繁に野村宛の葉書を送っている。八月九日の柳田から野村宛に「奈良県立図書館長となった野村伝四宛てに、葉書を書く」と記すように、柳田は野村が館長に就任していることを承知していたことが伺える。

柳田は、かなり親しく野村と交流していたことが、同年の柳田からの野村に送った書簡数から読み取れ、翌十六年三月十四日から三日間、野村自ら計画した「柳田先生編著書展観」を図書館で開催している。同展観を行ったことから、長年積み重ねてきた野村と柳田の深い交友関係が読み取れる。

野村は、また、前記した水木直箭に野村自ら水木宅に出向いて同展観の協力依頼をしている。

一方、柳田は同年三月十二日水木宛てに、「著作の陳列会（十四から十六日まで開かれた奈良県立奈良図書館での柳田国男編著書展観）はもう終わってしまったのか」と葉書を書き、柳田が野村の計画した「同展観」を気にし、水木に書簡を送っている。水木が野村からの直接協力依頼を快諾し、水木は同展観のための柳田の本を、笹谷良造や沢田四郎作らから借り、水木自ら「柳田国男先生略歴」の一枚刷り付録も作成している。この同展観の一連の流れから、野村・水木それぞれが柳田と個人的に大変親しい関係にあることが読み取れる。

また、前記したように、水木は「同展観」に陳列する柳田の本を、笹

谷・沢田からも借りているように、奈良の民俗学関係者（同志）の繋がり（31）の深さも読み取れる。

同年十一月十四日朝、柳田は名古屋から電車に乗り、伊勢方面から奈良県の八木、西大寺経由で奈良に來ている。日中、野村の案内で柳田は奈良公園を散策している。

かつて野村は、柳田から「方言集」をまとめてみたらいわれていた。野村は翌十七年に、柳田編『全国方言集』の一冊として、野村の生まれ故郷の方言についての『大隅肝属郡方言集』を出版している。翌十八年には奈良盆地の民俗学的見地（例えば、垣内の習俗・垣内の方言・集團移民と村落形式など）から掘り下げた『大和の垣内』を発刊している。同書では、野村は、大和の垣内名についても論じている。

一方、柳田は、同十七年一月に、地名論文「和州地名談」を発表している。この柳田の「和州地名談」の冒頭で、柳田は「さらぎ考」という論文を、大和誌上に見いだした時から、私はいつかは一度、大和の地名という問題を考えてみたいと思っていた。…」と述べている。ここに記された「さらぎ考」の執筆者が野村である。柳田が大和（奈良）の地名に興味を持つきっかけが、野村の論文、しかも、柳田はかなり以前から、奈良に関する地名に関心をずっと抱いていたこともわかる。（32）

では、中野と野村とは、いつ頃出会い、親しく交流するようになったのか。前記したように、生前、筆者は池田末則より、野村と中野そして末則との出会いについて聞いたことがある。中野は、野村が五條中学校の校長をしていた同八、九年頃からの知り合いだといっていた。

末則自身は、野村と本格的に交流をするようになるのは、野村が図書館長を退任する同十七年前後から野村が逝去した同二十三年までである。その間、末則は同十八年から同二十年の終戦まで、海軍航海学校に在籍していたので、野村とは数年間の交流だったが、中野も末則も野村が住

んでいた奈良県五條町とは、大変、縁の深いところだった。

同地に、明治時代後期から昭和時代に政治家・実業家・醸造家として活躍した山本米三がいた。山本は、銘酒「松の友」醸造元である家業の酒造業を営み、明治後期から銀行の監査役・取締役、信用組合理事長、宇智郡酒造組合長、五條町会議員、奈良県地方森林会議員、奈良県多額納税者として貴族院議員などを歴任した。戦後、昭和二十八年十月には五條町長に、昭和三十二年十月、五條町を含む宇智郡八町村が合併して五條市が誕生し、無投票で初代市長に山本が選出された。

さらに、同郡だった南宇智村も同市編入も実現し、これを契機に山本は昭和三十二年二月市長を退任した。

中野は林業、山本は酒造業で、中野家と山本家、いずれも素封家で、山本は森林会議員をするなど古くから（中野の親の代から）中野と交流をしていた。

野村は、山本の地元、五條中学校の校長ということで、地元の有力者である山本とは、野村が同地に居を構えた頃から、野村は山本を知り地元の良き理解者の一人として交流をしたと考えられる。

中野は山本を介して同八、九年頃、野村と出会った。また、末則が山本と出会うきっかけは、中野を介して出会う事となる。山本は、終生、中野・末則の良き理解者だった。⁽³³⁾野村は昭和二十三年に逝去した。

ハ、柳田と交流した招待者の水木・岸田と同志たち

柳田と最も交流したのは、水木直簡である。水木は、明治三十年、奈良県生駒郡郡山町に生まれ、大正十年に國學院大学文学部国文学科を卒業した。中学生（旧制県立郡山中学）の時、折口信夫の『口訳万葉集』全三巻を耽読し感動し、折口が卒業した学校ということから大正六年九月に國學院大学の入学試験を受け、その後、同大学へ進学した。在学中は、折口に国文学・民俗学を学ぶ。大正九年、水木も所属した折口の主

宰する「郷土研究会」の第八回（同年九月二十八日）、第九回（十月五日）の例会が、折口の当時の東京大久保の自宅で開催された。これらの例会の講師が柳田だった。水木は、第八回の例会で、初めて柳田と直接出会った。水木は、第九回の例会があった翌月の二十九日、折口にお伴として、三田の慶應義塾での柳田の課外講演を聴講に行った。その時、折口が水木を柳田に紹介する。柳田は、水木が以前二度ほど会ったことのある水木要太郎の子⁽³⁴⁾ということを認識する。水木は、折口を「先生」、柳田を「先生の先生」と二人を師匠と敬い、終生、師事した。

水木は、國學院大学を卒業後、折口の言いつけで、水木は大阪の府立市岡中学校に九年間勤め、中野から招待され、研究所創設懇談会に、水木が出席した頃は、水木は折口の母校、府立天王寺中学校の教諭だった。⁽³⁵⁾

水木の著書『隨筆折口信夫』の中から、水木と柳田の交流、また、柳田を慕う水木をはじめ、その同志たちと柳田との交流を、水木が書き記した部分のいくつかを、左記から次のように（年月日など順に）抜粋する。⁽³⁶⁾

「水木…私の弟と郡山中学で同級だった（植栗）与門君が、私の後を追うて国学院大学に這入って来たのは、大正八年の九月だった。…与門君は、やがて小石川区竹早町の私のいる下宿に移って来た。…私たちの師匠の折口信夫先生が、その近くの金富町のお針屋の二階におられたので、しげしげお伺いするのに都合がよかった。先生が大久保の方へ移られて後も、私たちはそこにいた。…同じ下宿にいたのだから、何かと行をとにもにした。折口先生を中心にした郷土研究会にもいっしょに出た。慶應義塾で柳田国男先生がふくろあの講義をせられたのを、折口先生並びにその一党が聴きに行った仲間にも加わった。…」（一七〇―一七一頁）

「…昭和二年の四月になって、あの有名な「蝸牛考」が人類学雑誌に出

始めた。アサヒグラフには「方言と昔」と題して二十九回続けて書かれる。これを手始めに、次から次へと方言を根拠としての前代文化の研究を発表され、私の稿本「柳田先生著作年譜」を賑わして行った。さらに民俗語彙整理の大事業は、昭和七年の『山民語彙』を始めとして、次々と各種の雑誌に発表せられ、単行本としては『産育習俗語彙』以下、既に九冊世に問われた。」(二三三頁)

「柳田…昭和六年(五十七歳)四月十日から五月十一日まで、…伊賀・奈良及び播磨に桜を賞し…。」「水木…、一ヶ月に及ぶ長い旅行だったらしい。その第一日の四月十日奈良ホテルで会い、柳田にお供して、紀寺の高田十郎を尋ねた。…長年高田が勤めていた奈良の師範学校を退職して、その後の生活の基盤を心配して柳田は高田を尋ね…。」(二二八頁)

「水木…同九年十一月十一日、猿沢池畔の魚宇旅館に柳田を訪ねる。前月の二十七日、大阪女子専門学校での柳田の講演会を聴講し、柳田と奈良で会う…。」(二三八頁)

「水木…同十一年一月十八日の奈良女子師範学校での柳田の講演を聴講し、その後、奈良郷土会(高田十郎主宰)の座談会に出席、その後、笹谷と共に大阪に出て、沢田君宅での大阪民俗談話会の先生を囲む座談会に出席。」(二三八頁)

「水木…『地名の研究』(古今書院 同十一年一月十四日印刷 同年同月十八日発行) この中には、民族・歴史地理・郷土研究・土俗と伝説・考古学雑誌に載せられた地名に関する文章が、小論文に至るまで、ほとんど網羅されている。編者山口貞夫の深切に感謝すべきである。」(二五七頁)

「水木…大和で(柳田)先生の著書の展覧会が開かれようという御時世になったのである。…同十六年三月十四日から三日間、奈良県立図書館

での「柳田先生編著書展観」の流れは、…。」(二二四頁)

「水木…同二十四年五月二十九日、奈良女子高等師範学校の講堂で朝日古典講座、「大和と民俗学」。垣内の話をせられた。その後で座談会…。西大寺駅でお別れしたが…。」「水木…六月一日の夕方、東大寺塔頭の観音院お伺いした。…長谷川如是閑翁は、「柳田君はどこへ行ってもお弟子がいるのだね」と言われた。…前日吉野へ岸田定雄君が伺うた時も、同じ事を言われたそうなの。…。」(二二九頁)

「水木…(柳田は)次の年(二十五年)の十月下旬には、折口先生の御案内で、吉野・当麻と泊まれたが、私は大阪で両先生にお目に掛かっただけであつた。」(二二九頁)

「水木…(柳田は)同二十六年十月十九日、天理図書館で日本宗教学会の公開講演、その前日、先生が文化勲章を授けられることと報道された。…二十三日沢田君宅の近畿民俗学会に出、二十四日は大阪外国語大学・金蘭会女学校での講演に水木お供…。」(二二九頁)

「水木…(柳田)昭和二十八年四月二十一日、奥様と御同道で奈良に見えたのが最後となった。この時は、県庁からお供、春日野荘にお宿を柳田は決めていたが…すぐ近くの奈良ホテルへ御案内した。…先生は、今年お逢いした時、もう一度、大和へ行きたいがとおっしゃっていた。世の中は思うようには行かぬものである。悲しい。」(二三〇頁)

「水木…(植栗)与門君は、私よりも一年おくれて国学院を出た。…与門君は、もう一々は覚えておらぬほどに、転々と学校を変わった。…とうとう満州へわたることになった。…与門君が満州から大和に帰って、片桐中学の校長になった時」(一二二頁)、「水木…高等学校の校長になってから十一年近く、…榛原・添上・桜井と、行けばいつでも行ける処にいながら、…榛原のころ、ただ一度だけ校長室を訪れたことがある。同二十八年九月、われらの師匠、…折口信夫先生が亡くなっ

て、橿原神宮で先生を偲ぶ会を催したとき、仲間の笹谷良造が突然、この神域に先生の歌碑を建てたらどうかと建議し、：笹谷・植栗・水木の三人：、榛原に集まったのである。」(一七四頁)

と、水木の記す、水木と柳田の交流、また、柳田を慕う水木をはじめ、その同志たちと柳田との交流からも、中野が招待した水木・高田・野村・岸田をはじめ、笹谷・沢田・植栗なども柳田を慕う同志であった。

奈良(大和)には、多くの柳田の知り合い(同志)がいて、さらに、大和(奈良)の研究者同志の繋がりも深く結びついていたことも読み取れる。

池田彌三郎は、水木の著書『随筆 折口信夫』の「跋」(二六六頁)で、「：水木さんの名を始めて耳にしたのは、：柳田国男先生という方は、御自身の文章の掲載誌は必ず一部、水木さんに送っている。ということ。：神様のごとくに、折口先生を通じて望み仰いでいた柳田先生に、そうさせるだけの信頼感を持たせている水木さん：。」と述べている。

以上のように、柳田の奈良での繋がりのある同志との関わりから、柳田は、中野が昭和十七年三月十三日に、「大和の地名研究に関する懇談会」を開催したこと、あるいは事前に開催することを、水木をはじめ、柳田と交流する歴史・民俗学関係の大和の同志の誰かから情報を知ったあるいは知り得ていたことは確かだと思う。

中野の日本地名学研究所の前身である大和地名研究所は、大和(奈良)の多くの人たちに支えられながら、多くの大和(奈良)の研究者の繋がりの中から、特に、柳田と親交がある民俗・歴史学の同志が下支えとなつて、大和で産声をあげることとなったのである。

(すべて先生と敬称付けるべきであるが、省略した。お許しいただきたい。)

【謝辞】

本稿を作成するに当たり、小田富英編『柳田国男全集 別巻一』(筑摩書房 二〇一九年)の「柳田国男 年譜」を大いに活用し論考を進めることができた。編集された小田富英氏に感謝申し上げる。

註

(1) 『故郷七十年』は、昭和三十二年(一九五七)十二月から翌年(一九五八)年三月にかけて、柳田が語ったものを、神戸新聞が創立六十周年記念として、昭和三十三年一月九日の第一回から、九月十四日まで二〇〇回連載された。連載後、神戸の「のじく文庫」から単行本『故郷七十年』(昭和三十四年十一月十五日印刷 昭和三十四年十一月二十日発行)された。「その際に柳田自身によって加筆訂正と、話の順序の組み換えがおこなわれ、さらに、柳田の没後に『定本柳田国男集』別巻第三を編む際には、新聞には掲載されなかった未発表の原稿が「拾遺」として加えられた。」(柳田国男『柳田国男全集』第二十一巻 五九四～五九六頁(解題) 筑摩書房 一九九七年。柳田国男『故郷七十年』四九七～四九八頁(解説) 講談社学術文庫 二〇一六年。柳田国男『故郷七十年』朝日選書7 鎌田久子『故郷七十年』について(四〇九～四一〇頁 朝日新聞社 一九七四年)を参考に記す。

本文のはじめにの「」内の文は、朝日新聞社から朝日選書7として発行された柳田国男『故郷七十年』の三二〇頁に載る文を引用した。

(2) 日本地名学研究所は、昭和三十一年に奈良から京都に移転し、移転と共に所名も大和地名研究所から日本地名学研究所に改称した。今回は、京都に移転する前(大和地名研究所の頃)について述べたい。

(3) 註(1)

(4) 学術雑誌『地名学研究』の詳細については、別稿で述べたいと思う。

(5) 柳田からの書簡の経緯については、生前、池田から聞いた。

(6) 研究所内に置いた「地名学研究会」をはじめ、註(4)の学術雑誌『地名学研究』の発刊や地名関係学術書・資料等、研究所が行った出版事業について、別稿で述べたいと思う。

(7) 小田富英編『柳田国男全集 別巻一』筑摩書房 二〇一九年の「年譜」に見える人名と、地名学研究会編『地名学研究』(第二號) 日本地名学研究所

昭和三十二年六月二十五日印刷 六月三十日発行の『同』第二號卷末に載る昭和三十二年五月末現在の記載で、当時の「会員並びに協賛者名簿」が載っている人名を対比してざっと記した。会員名簿には、北は北海道から南は鹿児島までの百七十三名の名が載っている。

- (8) 地名学研究会編『地名学研究』（創刊号）日本地名学研究所 昭和三十三年三月三十一日発行。

- (9) 当時、中野が住んでいた南葛城郡吐田郷村は、昭和三十一年に同郡葛城村と合併し、葛上村となり同三十三年より現在の奈良県御所市となった。

- (10) 後に、中野は、大学時代に研究した『風葉和歌集』を、昭和八年『校本風葉和歌集』（京都・賛精社）を本名である中野莊次で発刊した。中野は、その後も和歌関係本では、森繁夫編・中野莊次補訂『名家伝記資料集成』（思文閣出版）が、昭和五十九年に出版された。『同集成』とは、短冊の蒐集、伝記研究で知られた大阪の実業家、森繁夫が二十年以上の歳月をかけて調査編集した草稿を、広く古典籍の蒐集家でもあった中野が、森の草稿から更に二十数年の歳月をかけて浄書、補訂したものである。また、同六十一年には、中野が関わった中野莊次編『和歌俳諧人名辞典』（臨川書店）もある。

- (11) 池田の生まれた御所町は、後に御所町を中心に葛村、葛上村、大正村の四ヶ町村が、昭和三十三年に合併し、現在の奈良県御所市となった。

- (12) 池田は、地名の考察を行なう上において、最も大切なことは地名（特に小字・俗称・古称地名）の収集・比較調査の必要性を感じていた。

- (13) 池田末則『日本地名学研究五十年史―池田末則著書目録』日本地名学研究所編 一九九〇年（非売品）。

- (14) 瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス―日本民俗学の成立と展開―』ぺりかん社 一九七九年。

- (15) 大和国史会『大和志』（復刻版）（巻次年月次・創刊號（昭和九年十月）巻6號（昭和十九年六月））東京／吉川弘文館、出版年一九八二―一九八三の第11編第3號通巻第14號に、中野莊次「吉野山林語彙」一六〇―九八頁から。中野莊次は中野文彦の本名である。

- (16) 山口貞夫は地理学と民俗学との学問的交流をはかった。山口は東大理学部地理学科では辻村太郎のもとに地理学を学ぶ。（辻村は後に「地名学研究会」の会員に名が見える。）山口は、昭和八年から柳田邸ではじまった民俗

学講義を聴講し、以後、木曜会の同人となり活動する。また、山口は昭和九年から柳田が指導し始まった「山村調査」にも参加した。この成果を、山口は昭和十三年発刊の柳田国男編『山村生活の研究』の中に、自らが担当し調査したところを世に問うている。柳田との信頼関係のもと柳田国男著『地名の研究』の「あとがき」で山口が記すとおり「：最後に本書の編輯、校正、索引作製は小生に委せて頂いた。誤あらば責任は小生にある。」と、『同書』が生れた。山口は、三十四歳という壮齢にして、昭和十七年六月逝去した。

- (14) と同註の二九八―三二〇頁、池田は池田末則著『地名伝承学』一〇五頁「柳田先生は地名の研究に関して、「私はおかしいほどたくさんのおまじないをしてゐる：結局のところは、地名研究の発達を助ける手段として、各地在住者の今後の採集（地名）を期待するほかはない」（柳田国男『地名の研究』古今書院 一九三六年の口語体）ともいわれた。」日本地名学研究所 一九八六年と記している。岡田俊裕『日本地理学人物事典（現代編1）』一九四〇―二〇一頁 原書房 二〇一四年。

- (17) 筆者は、生前、池田から聞いた。

- (18) 大和国史会編『大和志』第九十一號「編集後記」昭和十七年四月一日

- (19) 田村吉永は、明治二十六年奈良県吉野郡白銀村（現在の五條市）生まれ、奈良師範学校（現在の奈良教育大学）卒業後、奈良県内で中学校教員をしながら、歴史・民俗・郷土史研究を行い、二十代前半には、柳田とも交流していた。また、大正十二年に大和史学会を創設する保井芳太郎や、同会の幹事となる高田十郎、そして、同会に協賛する水木直箭の父である水木要太郎らとも親交があり、大正・昭和期の大和（奈良）の歴史・民俗・郷土史研究で活躍した多くの研究者たちの人的交流に貢献した功績は極めて大きい。田村は、中学校教員後、大和国史会を主宰し、同会の雑誌『大和志』を編集及び発行しながら、その後、近畿日本鉄道史料編さん室勤務、梅光女学院短大講師、教授を経て、梅光女学院大学教授となり昭和四十九年退任し、同五十二年逝去した。中野にとって、地名研究所の創設から、その後の研究所の運営・発展において、田村の存在と長年の交流が大きかった。田村の存在が、中野（・池田）と柳田との交流が良好に進み、大和の地名研究から、日本の地名研究を模索するという中野（と池田）の良き理解者の一人だったと思う。田村が自ら編集する大和国史会の機関誌『大和志』（同十七年四月一日発行

号)の「編集後記」に、「…大和地名研究に關する懇談會があつた、…双手をあげて本會としても出来る限りの協力をしてゆき度と思ふ。何れその報告書等も今後の誌上を飾る事とならうが、その採集等については具體的な方策を定めて廣く會員諸賢の御協力を願ひ度いと思ふ。」と、田村が記したこの一文が、大和の地名研究、その後の日本の地名研究のエポックになったことは疑う余地はないと思う。

(20) 土井實は、明治四十年大阪府大阪市生まれ。長年、奈良県内の教育や教育行政や文化財行政に従事し、元奈良県教育委員事務局の学務課長や文化財保存課長を歴任し、その後、奈良文化女子短大教授、名誉教授。その間、元奈良市文化財審議会議長も務めた。自らのライフワークだった金石文の研究と、長年の教育・文化財行政の関わりから多くの研究者と交流し幅広い人脈が生れた。筆者が末則の助手をしていた頃、ちょうど、土井が、後に『奈良市史』社寺編(吉川弘文館)として刊行されるための金石文調査を行っていた。昭和五十六年十月〜同五十七年六月にかけて、土井が行う金石文の調査に何度も同行し、拓本の取り方を直接指導を受けた。土井は、後に日本地名学研究所二代目所長となる末則を生徒、顧問の立場で、中野と池田源太と共に支えた。昭和五十八年三月、私が帰富する折、「平凡が非凡」と書き記した土井直筆の色紙を頂いた。今も私の手元にある。

『奈良県史』第十七卷 金石文(上 昭和六十年七月二十五日)・(下 昭和六十二年十月二十五日発行) 名著出版など)

(21) 堀江彦三郎は、明治三十一年北葛城郡高田町に生まれ、東京南科学校(現在の東京歯科大学)を卒業後、昭和初期には、地元、高田町本郷(後の大和高田市本郷)で、堀江歯科医院を開業し、歯科医の傍ら高田郷土文庫主とし、北葛城郡の町村史などを中心に多くの郷土史に関わり、自らの随筆集『七つ星』『高田の星』や地名に関する『高田郷土史話』などの著書を残し、在野の郷土史家として活躍し、折口信夫や徳富蘇峰とも交流した。堀江は平成二年逝去した。筆者が末則の助手をしていた時、末則と共に大和高田方面に行った折、よく堀江を訪ねた。その頃は、すでに堀江は歯科医をやめ、自院を子に任せていた。何回か末則が子に齒の治療してもらったこともあった。

(22) 高田十郎は、明治十四年、兵庫県赤穂郡矢野村に光葉十郎として生まれ、中学卒業後、母校の高等小学校で代用教員を務め、二十三歳の時、婚姻によ

り高田姓となる。明治四十年、二十六歳の時、早稲田大学高等師範部を卒業し、その後、奈良師範学校の国語・漢文の教師として赴任し、昭和六年まで、約二十五年間教員生活を送り、在職中から謄写版個人雑誌『奈良』(大正九年〜昭和八年)を発行。昭和十年に奈良郷土会を設立し、自ら会長となった。郷土会設立する前の昭和八、九年頃、中野と高田は出会い、以後、親しく交流することとなる。

高田は、また同十五年には奈良県童話連盟も設立し、同会の会長も務めた。高田は、師範学校に奉職していた時、同僚教師への聞き取りや、同学校での教え子たちが奈良県内の各小学校に多く在職していた。この卒業生たちとのネットワークが、高田の民俗学・金石文関係の研究をはじめとする地方史・郷土史編さんなど多くの諸活動を支えた。高田は、奈良県立図書館とも関係が深い、次に述べる野村伝四も良く知り、高田の教え子であり、後に日本地名学研究所の研究組織「地名学研究会」の会員となる郷土史家・童話家であった仲川明が館員であったことから、奈良郷土会や奈良県童話連盟の事務局が同館に置かれたのも奇縁か。『奈良県立図書館報 うんてい No.74』「温故知新 高田十郎」平成十五年三月三十日。

柳田國男の自らの一生を回顧した聞き書き『故郷七十年』の「高田十郎君のことなど」で、「播州の人で、いちばん我々が大きい影響をうけた、といふよりは、親しくつき合った人の一人に高田十郎君がある。…」(柳田國男著『定本柳田國男 別巻第三(新装版)』筑摩書房 一九七一年)と、高田十郎のことが書かれている。

(23) 永島福太郎は、大正元年栃木県の現在の佐野市に生まれ、昭和九年國學院大学国史学科を卒業した。主に中世史を専門とし、卒業論文は「大和守護職として觀たる興福寺没過程の研究」で、学生時代から奈良に関心を寄せていた。東京大学史料編纂所員後、旧制奈良県立奈良中学校教諭に、創設懇談会頃は同校教諭だった。その後、永島は新制奈良県立奈良高等学校教諭となり、昭和二十九年から関西学院大学に転出し、後に教授となり、同五十六年定年退官し、名誉教授となる。永島は平成二十年に逝去した。筆者自身、末則の助手をしていた頃、ちょうど、永島が関西学院大学を退官した後から、何度も会った事がある。研究所は奈良県南葛城郡から京都市へそして昭和四十一年奈良市に移転した。奈良市の研究所は、永島の自宅からほど近い所にあり、

永島は、退官後、時々ふらつと来所した。筆者が末則の助手をしていたとある日、永島から直接聞いた「茶の湯の話」は、今も脳裏に焼き付いている。

- (24) 野村伝四『奈良県立図書館報 うんてい No.74』『温故知新 野村伝四』平成十五年三月三十日。

- (25) 註 (24)

- (26) 池田源太、その後、昭和十九年奈良青年師範学校教授（教務部長）に転任し、同二十四年奈良学芸大学（後の奈良教育大学）教授に。同三十八年定年退官、名誉教授後、龍谷大学教授を務めた。

そして、源太は、中野・土井と共に、後に日本地名学研究所二代目所長となる末則を生生涯、顧問の立場で支えた。源太は平成七年に逝去した。源太は、奈良教育大・龍谷大の教え子や現役学部生・大学院生を中心に、研究会「人間生態学談話会」を主宰され、月に一度、自宅で研究会（例会）を開催され、私も源太に誘われ二度ほど参加したことがあった。生涯、学生を愛し、研究の楽しさを教示してもらった。昭和五十八年三月、私が帰富する折、「文質彬彬、然後君子」（『論語』）と書き記した池田直筆の色紙を頂いた。今も私の手元にある。（中葉博文『富山 自然・人工地名の探究』池田源太・高瀬重雄先生から学んだこと」桂書房 二〇一七年）。

- (27) 山本賢三は、池田末則と同郷の当時、御所町に住み、末則は同町上方、山本は同町上方だった。山本は転任により、その後、岩手県花巻市に引越した。（『地名学研究』第二號、第三号）

- (28) 柳田の『地名の研究』（初版・「和州地名談」が載る改訂版）本と、中野・池田の研究所に纏わる詳細な私見は、別の機会の「日本地名学研究所（前身大和地名研究所）と柳田国男 後編」で述べたい。

- (29) 大和国史会編の機関誌『大和志』（昭和十七年四月一日号）で、田村が「編集後記」に、「…大和地名研究に關する懇談會があつた、…双手をあげて本會としても出来る限りの協力をしてゆき度と思ふ。何れその報告書等も今後の誌上を飾る事とならうが、その採集等については具體的な方策を定めて廣く會員諸賢の御協力を願ひ度と思ふ。」と、註(19)の（ことと同じ）。

池田末則『日本地名学研究所五十年史―池田末則編著書目録』日本地名学研究所編 一九九〇年（非売品）。

- (30) この三人（高田・野村・水木）は、「柳田国男 年譜」（小田富英編『柳田

國男全集 別卷二』筑摩書房 二〇一九年）に見え、「同年譜」や水木直箭『隨筆折口信夫』『柳田国男』（角川書店 一九七三年）。田村吉永は昭和六年に大和国史会を創設した。昭和九年雑誌『大和志』を発刊する。『大和志』創刊号（昭和九年十月一日）から『同志』第百十七号『大和志総目次』（昭和十九年六月一日）

- (31) 水木直箭『隨筆折口信夫』『柳田国男』（角川書店 一九七三年）。

- (32) この三人（高田・野村・水木）は、「柳田国男 年譜」（小田富英編『柳田國男全集 別卷二』筑摩書房 二〇一九年）に見え、「同年譜」や水木直箭『隨筆折口信夫』『柳田国男』（角川書店 一九七三年）。

- (33) 後の同三十三年二月に発刊された『五條市史』（上・下巻）は、当時、市長だった山本から命を受け、末則が『同史』の企画責任を一切任せられ、同市史調査を数十名の専門研究者によつて分野別に編成し、地名に関する同市の調査・執筆は自ら末則が担当し、他分野の責任編集も末則が担当した。当時の各分野の執筆委員は、その後、国公私立の大学・研究機関など各界のトップクラスの研究者となり活躍した。この『同史』（上・下巻）一連の事業が、後述するが、その後の末則自身の人的交流や自らの地名論（地名伝承論）確立の起点となる。

筆者、末則の助手をしていた二年目の同五十七年の秋、末則と五條市方面に調査に行ったことがある。その日は、奈良の研究所周くの近鉄奈良駅前から出ているバス（五條バスセンター行き）に乗り末則に同行した。山本は同四十六年に逝去し、山本の息子さんらしき人（末則ほどの年齢か。それより上か下か。わからなかった。）が、家業を継いでいた。末則と大変親しく話をしていた。筆者自身、その方だったかその奥様か、柿の葉寿司と柿ワインを帰り際に頂いたことを今も記憶に残っている。お昼ちよつと過ぎに、末則とバスで近鉄橿原神宮前まで行き、駅前近くで食事を済ませ、タクシーで大和高田市の堀江宅を訪ねて夕方、研究所に帰った。

- (34) 水木要太郎は、愛媛県生まれ。奈良県尋常師範学校教諭、奈良県尋常中学校（旧制郡山中学校）教諭を経て、奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）教授となり、昭和十三年逝去した。要太郎は歴史家であり、コレクターでもあった。大和の生き字引といわれ、保井芳太郎、高田十郎、仲川明らと交流（『奈良県立奈良図書館報 うんてい No.74』平成十五年三月三十日発

行の温故知新「水木要太郎」し、他、田村吉永をはじめ、当時の大和（奈良）の多くの研究者と交流した。水木直箭は、自著『随筆折口信夫』の中で、「柳田国男先生の「厄介及び居候」という論文の中に、水木要太郎翁の大和方言集に、ケナイド、招かざるに來て食事などをする客と出て居る。」とあって、「（二二二頁）」というように、柳田が自らの論文の中に、柳田が父・要太郎の方言集のことを引用したことも書き記している。

- (35) この三人（高田・野村・水木）は、「柳田国男 年譜」（小田富英編『柳田国男全集 別巻二』筑摩書房 二〇一九年）に見える。水木については「同年譜」や水木直箭『随筆折口信夫』（柳田国男（角川書店 一九七三年）の同書と「官報」第四四六二號 昭和十六年十一月二十一日 金曜日）に公立中學校教諭二任と載る。水木は同校に十七年勤めた。

その後、途中、水木は、五年ほど教壇を降りたが、同三十七年からは、帝塚山学園の短期大学教授として迎えられ、以後、教育、そして国文・民俗学研究などで活躍し、同五十一年に逝去した。

- (36) 筆者の方で、年代順にし、引用部分がわかりやすいよう一部内容も編集して書き記し抜粋した。

- (37) 「柳田先生編著書展観」の一連の流れは註(31)を参照。詳細は水木直箭『随筆折口信夫』『柳田国男』（角川書店 一九七三年）を参照。

参考文献

- ・ 日本地名研究所編集・監修『地名と風土』（第十四号）中葉博文「我が恩師、池田末則の人物像と「地名論（地名伝承論）」日本地名研究所 二〇二〇年。
- ・ 池田末則『日本地名学研究所五十年史―池田末則編著書目録』日本地名学研究所編 一九九〇年（非売品）。
- ・ 日本地名研究所編『日本地名研究所の歩み』日本地名研究所 二〇〇一年。
- ・ 池田末則『地名伝承学』日本地名学研究所編 二〇〇二年（非売品）。
- ・ 池田末則『地名伝承学論』（補訂）クレス出版 二〇〇四年。
- ・ 池田末則『地名の考古学―奈良地名伝承論』勉誠出版 二〇一二年。
- ・ 奈良県史編集委員会・池田末則著『奈良県史 第十四巻 地名』名著出版 一九八五年。

コロコロの響き

―飯島康夫氏の最終講義を聴いて―

板橋 春夫

はじめに

別れは来る。令和六年三月二十三日に新潟大学飯島康夫氏の最終講義があった。最終講義は教員の個性が如実に出るものである。興味津々で聴講ノートを持って出かけ、全国から駆け付けた卒業生約一〇〇名と一緒に講義に臨んだ。演題は「民俗の野帳から」である。少し掠れた声で講義は始まった。着任した頃は地声が大きく教室の後ろまで聞こえたが、今はマイクが必需品ですと語り笑いを誘った。その時点で、聴衆は氏の話術に取り込まれた。小稿は、飯島氏の最終講義を紹介しながら、氏がフィールドで出合ったヤママユ（山繭）とウスタビガの繭について考えてみるのが目的である。

一 三〇冊に及ぶ民俗調査報告書

飯島氏の講義は、調査実習で作成した民俗調査報告書をもとに、民俗の特色と思い出をまじえたユニークなものであった。新潟県十日町市仁田で自家用車が溝にはまってしまったエピソードが聴衆の笑いを引き出していた。筆者は、溝にはまった連想から、仁田とは柳田国男『後狩詞記』に出てくるニタ地名であろうと勝手にイメージして聴いていた。

先任の福田アジオ氏が始めた民俗調査は三〇箇所を数えるという。飯島氏は、そのうち二四箇所の記事に関わった。調査地の選定は新潟県を中心とし、周辺各県も含めてやってきたという。学生への調査指導や執筆指導、そして編集作業を考えると、その努力は並大抵ではない。百

ページを超える報告書である。筆者は、日本の大学でこれほどコンスタントに、しかも充実した民俗調査報告書を刊行した例を知らない。その調査成果は一人ひとりの卒業生の宝物であろう。民俗学の卒業論文や修士論文を生み出した母体でもある。教育者飯島氏の面目躍如である。

講義では、飯島氏の研究関心である社会伝承が多く語られた。特に佐渡のジョウと呼ぶ小地域集団に関しては、起源を不明としつつも「中」「衆」「所」と関わることを指摘した。単なる村組ではなく地理的社会的なまとまりをもつ家々の集まりと定義した。各地の事例を詳細に読み解いていく手法は研究手法の手堅さを感じた。魚沼地方の割山慣行、農業用水のあり方、祭礼行事への目配りなど、地域を理解する方法論の復習でもあった。退職後、さらなるご研究の深化が期待される。

当日、参加者に配られた手作りの『飯島康夫先生退職記念冊子』はA5判一八ページの力作で、氏の業績と二年生によるインタビュ記事で構成され、生い立ちから筑波大学で民俗学を学ぶいきさつが語られる。飯島氏は「人の生き方とかを知って感動する時があるんですよ。別の生き方での、そういうところに触れることができるのはものすごくかけがいのないこと」と語り、民俗教育を通して自身も話者から色々と学んできたという。民俗調査は、いつも話者が先生であることを知る。

二 ウスタビガの繭

ここからは筆者が講義に触発された感想などを記していく。飯島氏は、東蒲原郡鹿瀬町水沢でウスタビガの繭に出合う。新潟大学赴任前の群馬県立歴史博物館時代には養蚕調査を精力的に行っており、筆者も共同研究者として調査をする機会を得た。当時の筆者は、家蚕以前と想定していた山繭に興味を持っており、その山繭調査の過程で「山繭と鮫の魅入り伝承」という論文を執筆した。その延長として、福島県立博物館の図

録『天の絹絲』に、論文「ワニと山繭―鮫の魅入り伝承―」にみる海と山の交流―」を執筆している。

論文の主旨は、山繭の着物を着ていると鮫に魅入られる伝承が各地にあり、山繭が水を好む習性などと関連させてその伝承の解説を試みたものである。その一連の記述の中で、山繭を赤子の産着の背守りにつけることを記した。飯島氏が最終講義で説明されたように、山繭とウスタビガの繭はどちらも美しい緑色である。しかし、その性質は大きく異なる。ウスタビガは、財布のがま口のように開閉し、そこから成虫が出る。一方、山繭の場合は、繭を突き破って出てくる。図録に掲載されたエナギの写真は、山繭ではなくウスタビガであった(板橋 一九九八 一〇六)。

これは脇田雅彦・節子「ウスタビガのマユの伝承―岐阜県を中心に―」で論じられているとおりである。脇田は、筆者の論文を読み、筆者が山繭とウスタビガを混同している点を指摘された。聞いたことをそのまま記述する民俗調査の欠点と言えるかも知れない。自然界に棲む昆虫であるから、採集して同定する心がけが必要であった。その点、脇田夫妻は、実際にウスタビガを採集して古老の指導のもとで、繭の口を開けて中の蛹を取り出した。空になったところへ小豆粒を入れた。そして振ってみるとコロコロという音がしたという。脇田夫妻は聞いたことのない音(妙音)と表現している(脇田 一九九三 三)。

三 背守りとコロコロ妙音の意味

筆者は、ヤマビコと呼ばれた繭は、おそらく山繭であろうと考えていた。山繭を背守りにする理由として、子どもが山中で遊んでいてどこかへ行ってしまうと、こだまが跳ね返ってくるように、必ず帰ってくると伝承している。これは明らかに音が出なくてははいけない。コロコロと音を出すことに重要な意味があった。小さな布袋に大豆などを入れて背

守りとする慣習が福島・新潟・群馬の各県に存在していた。これを群馬などでマブリと呼んでいた。沖縄ではひきつけを起こした子どもに対し、子どもの着物の袖に小石を入れたが、それをマブイコメと称していた。「マブリ＝マブイ」と考えられる。小豆を入れる習俗と小石を入れる習俗の相互関連を想定してみたい。マブリは魂であり、小石や小豆もそれに関わるものであったと思われる。最初に音へ着目したのは脇田夫妻であつたが、それを評価した飯島氏の眼力にも敬意を表したい。

おわりに

最終講義の中で、飯島氏はウスタビガの繭に関して音に注目したと語っていた。筆者も同感である。音に関わる伝承は、東日本と西日本の山間部に共通するが、それを背守りに関連付けるのは東日本に限定される。脇田夫妻は長野県あたりの様子が判明すると面白いと書いている(脇田一九九九 一〇)。信州在住の民俗学者に期待したいものである。自然に関わる事象では、観察と実験がいかに重要かを思い知るのであつた。観察・実験・聞き書きの三位一体の關係が重要であることを飯島氏の最終講義は示してくれた。

《参考文献》

- 飯島康夫 一九九九 「ウスタビガの繭と山繭」『武尊通信』七七号 群馬歴史民俗研究会
板橋春夫 一九九四 「山繭と鮫の魅入り伝承」『群馬歴史民俗』一五号 群馬歴史民俗研究会
板橋春夫 一九九八 「ワニと山繭―「鮫の魅入り伝承」にみる海と山の交流―」『天の絹絲』福島県立博物館
脇田雅彦・節子 一九九九 「ウスタビガのマユの伝承―岐阜県を中心に―」『民具マンスリー』三一巻一〇号 神奈川大学日本常民文化研究所

アイヌ口承話者である白沢ナベのウエペケレ「カラスの恩返し」に関する考察

―対照性を好む心性の視点から―

大喜多 紀明

一 はじめに

本稿では、北海道千歳市蘭越出身のアイヌ口承話者である白沢ナベ(一九〇五―一九九三)¹⁾による、既に中川により文書資料化されたウエペケレ「カラスの恩返し」(中川二〇二二)を題材とした分析ならびに考察をおこなう。ウエペケレとは、アイヌ口承のジャンルの一つであり、いわゆる散文説話のことである。このテキストのストーリー上の特徴を、採録者である中川(二〇二二、三三八)は以下のように述べた。

これはまた、何事も事件らしい事件が起きない *uŋepker* 「散文説話」である。簡単に言ってしまうと、狩の度に獲物の肉をカラスにおすそ分けしていたことで、そのカラスから見守られることになり、獲物に不自由しなくなるだけでなく、子宝も授かって、大勢の子供たちに囲まれ、何不自由ない一生を送ることになったという話である。ドラマ的な要素は何もないと言ってしまうと良い。

つまり、このテキストのストーリーには、何ら事件らしい事件や、ドラマ的な要素が盛り込まれていない。こうしたドラマ性が低い口承が伝承されてきた理由として、中川(二〇二二、三二九)は次のように述べた。

ここで語られていることは、かつての人たちにとって真実なのであり、だからこそ後代の人間に伝える必要があると考えられたのであろう。

換言すれば、この口承は、娯楽性にとづくものではなく、「かつての人たちにとつての真実」（これは口承に描かれた内容の事実性を指している）を後代に伝承することを目的としているといえる。極論をいえば、「真実」の伝達が目的であれば、ストーリー的な盛り上がりや過度な修辭的裝飾は不要である。だが、そのような「真実」も、人から人へと伝承されるにしたがい、いわゆる口承文芸としての修辭的裝飾などが施されるなど、次第に洗練されていくと予想できる。本テキストは、そのストーリー性の乏しさゆえに、むしろ、ストーリー（あるいは話型）による影響と切り分けられた、話者の基本的な心性的特徴を理解するうえで有用な資料となる可能性を示唆している。

アイヌ口承には、しばしば裏返し構造がみとめられる。大林（一九七九）によれば、裏返し構造は異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」である。なお、裏返し構造は、当該構造を構成する要素対の関係性が対照であることが前提である。一方、アイヌ口承では、異郷訪問譚とはいえない形式でありながら、裏返し構造がみとめられる事例が紹介されてきた（大喜多二〇一六）。本稿のテキストは、「何事も事件らしい事件が起きない」ストーリーであり、主人公による異郷への訪問が描かれていないので、明らかに異郷訪問譚ではない。

以上をふまえ、本稿では、「カラスの恩返し」を題材に、アイヌ口承に裏返し構造が出現する理由が、アイヌ民族における対照性を好む心性にもとづくことの蓋然性の評価により、かかる心性がアイヌの特徴といえるかの検証をおこなうことにする。

二 裏返し構造と対照性

物語の構造上の前半に出現したテーマが、後半においては逆の順序で出現し、かつ、各対応する要素どうしのすべての関係が対照的であるとき、かかる構造は裏返し構造と呼ばれる（大林一九七九、依田一九八二、大喜多二〇一八）。例えば、次図で示すような、AとF、BとE、CとDはそれぞれ同じテーマであるが、内容が互いに対照的であった場合、この構造に相当する。⁽²⁾

A…○

B…△

C…□

D…■

E…▲

F…●

裏返し構造は、互いに対照的な関係性である要素対によって構成されている。一方、各要素対の関係が対照的であることに限定されない構造はキアスムス（例えば、松村二〇二〇、大木二〇二三）と呼ばれる。ここで、裏返し構造はキアスムスにおける構造上の下位概念である（大喜多二〇二三）。あるテキストに裏返し構造が出現するからには、当該テキストの作者あるいは口承でいえば口承話者に、対照性を好む心性があると仮定することができる。

大林（一九七九）によれば、異郷訪問譚における構造上の「共通の特徴」が裏返し構造である。換言すれば、当該話型を編成（つまり異郷訪問譚としての整合性を担保）する手続きを作者あるいは話者が踏むこと

により、結果的に当該構造が編成されるといえる。

一方、大喜多（二〇一六）は、とりわけアイヌ口承において、異郷訪問譚とはいえないテキストにおいても裏返し構造が表出する事例として、「ボヌンカヨー88」（村崎一九九九）、「いびきの話」89」（村崎一九九九）、「人食いおばけ」（知里一九八一）、「氷の上で」（田村一九九六）を紹介した。大喜多（二〇一六）で紹介した「氷の上で」を以下に示す。

（1）氷の上に小さなオオカミがころがった

氷が偉いからだろうよ（1）

（2）氷が偉いのに太陽に溶かされる

太陽が偉いからだろうよ（2）

（3）太陽が偉いのにその上を雲が通る

雲が偉いからだろうよ（3）

（4）雲が偉いのにそこから雨が落ちる

雨が偉いからだろうよ（4）

（5）雨が偉いのに土の上に落ちる

土が偉いからだろうよ（5）

（6）土が偉いのにその上に木が生えるの

木が偉いからだろうよ（6）

（7）木が偉いのにアイヌに伐られる

アイヌが偉いからだろうよ（7）

（8）アイヌが偉いのに死んでしまうの

アイヌが死んだら

フッサフッサと息をかけると

いいものだ

生き返るものだ（8）

大喜多（二〇一六）によれば、この口承は以下の裏返し構造からなる。

（1）変化① 氷（固体・冷たい）→オオカミが転ぶ

（2）変化② 太陽の熱（自然現象）→氷…溶けるとなくなる

（3）変化③ 太陽…空…雲が覆う

（4）変化④ 雲から雨が落ちる

（5）変化⑤ 土が雨を受ける

（6）変化⑥ 土…陸…木が生える

（7）変化⑦ アイヌの行為（自然現象ではない）→木…伐られて

人に利用される

（8）変化⑧ 息（気体・暖かい）→アイヌが生き返る

この口承では、（1）と（8）、（2）と（7）、（3）と（6）、（4）と（5）がそれぞれ互いに同じテーマであり、かつ、関係が対照的である。また、大喜多（二〇一六）では、アイヌ話者である萱野の談話テキストにおいて、完全な裏返し構造ではないが、裏返し構造的な性質がみとめられることも紹介した。なお、萱野茂の談話資料（菅一九九四）は口承テキストとはいえない。以上より、大喜多（二〇一六）が提示した仮説は、かかる裏返し構造の表出がアイヌ民族の心性に起因するというものである。

以上をまとめると、とりわけアイヌ口承テキストにおいて裏返し構造を表出させる因子は以下の二点である。

〈因子①〉…異郷訪問譚編成の因子

〈因子②〉…アイヌ話者に内在する対照性を好む因子

本稿では、因子①と因子②が互いに独立しており、かつ、物語に裏返し構造を生じさせる原因であると仮定することにする。

三 テキスト

本稿のテキストは「カラスの恩返し」であるのだが、本稿では、中川（二〇二一、三二七・三二八）に記載された「あらすじ」にもとづいた分析をおこなうことにする。なお、引用文中のアルファベットおよび記号は筆者によるものである。かつ、原文における改行については、引用文において便宜上すべて割愛した。

〔A↓〕私は大層な長者だったが、狩に行くとき二頭も三頭も獲物をとって、裕福に暮らしていた。妻も畑仕事をして、たくさん作物を採り、二つも三つも倉を建てた。私は山へ行って獲物を獲ると、棚を作って「カラスの神様におすそ分けします」と言いながら、その上に脂身や肉を切って乗せた。そうして暮らしているうちに、ある日夢を見た。いかにも神様という風貌の方が、私の枕元に座っていて、私の方を向くと言った。「私はカラスの神だ。お前は心の良い長者であるので、熊を獲っても鹿を獲っても、私たちの食べる肉を棚の上に乗せておすそ分けをしてくれる。そのことに満足して感謝しているので、これから狩に行っても、立派な鹿ばかり、立派な熊ばかり獲れるように見守ってやろう。そして、お前には子供ができないことになっていたのだが、男の子も女の子も大勢生まれ、その子たちがお前の面倒も見守ってくれることになるだろう。よくよく私の言葉を聞くのだぞ」という夢を見た。〔↑A〕〔B↓〕翌朝起きた私は拝礼を重ねた。私たちにはたしかに子供がおらず、さみ

しい暮らしをしていたのだが、それから一年ほど経って、妻が子供を宿した。生まれた子供を見ると、私の半分を割いたような、私そっくりの立派な男の子であった。その子を妻と取りあひしながら、かわいがって大事に育てていた。それから、妻は女の子も男の子も大勢産んだ。息子が大きくなると、私は山の狩の仕方を教えた。山のどこを歩くと立派な鹿が獲れ、どこを歩くと立派な熊が獲れるのかを、連れ歩いて教えたので、私と同じくらい狩が上手になった。魚を獲りに行っても、私のように立派な魚ばかりを獲って〔原文ママ〕来るので、いつも良い食事をしていた。息子たちが順々に大きくなると、順々に狩の仕方や魚獲りの仕方を教えた。〔↑B〕〔C↓〕娘たちも順々に大きくなると、妻が大きくなれば、小さなきれを与えた。最初のうち娘たちは上手に裁縫ができないので小さく縫い縮めてしまいが、妻は「立派な女の子だから上手に縫えるね」とほめそやしたので、大きくなると何をやらせてもとても上手に作り、美しい刺繍ができるようになった。娘たちは大きくなると妻の畑仕事も手伝い、秋になると収穫を上げて二つの倉、三つの倉を建てた。〔↑C〕〔D↓〕息子たちも山へ行くと、二頭の獲物、三頭の獲物を獲るようになり、私は自分の家の周りに息子たちの家を建て、そこに美しい女性を妻に迎えさせた。娘たちも私の家の周りに家を建てさせ、立派な長者を夫に迎えた。息子たちは立派な熊、大きな熊を獲ると、私を招いてご馳走をたくさん食べさせてくれ、帰りには肉の良いところを土産に持たせてくれる。そうやって何を食べたいとも欲しいとも思わずに暮らしているうち、私も妻も年老いた。嫁たちも畑仕事をして二つの倉を建て、三つの倉を建ててくれる。カラスの神がいままで私を見守ってくれたと言ったので、子供たちのことも見守ってくれているのだと思い、私はお酒を造ってはカラス

の神をお祀りしたので、息子たちも怪我をすることもなく狩に行く様子を見ながら、いっそう長者となつてくらしているうちに、もはや年をとった。何か悪いことをすると悪い方へ向かつていくものだが、何か良いことをすると良い方へ向かうのだと息子たちにも娘たちにも言い聞かせた。そうしているうちに孫も大勢できて、今は年老いたが、カラスの神が私を見守ってくれたおかげで、本当の長者となつて人生を終えるので、そのことを語り残してこの世を去るのだよと、一人の長者が語った。(↑D)

一節で述べたように、テキストのストーリーにおいては、「何事も事件らしい事件が起きない」。かつ、主人公はアイヌとしての日常生活を送るだけであり、主人公にとっての異郷への訪問が記述されたストーリーではない。したがって、明らかに異郷訪問譚とはいえない。また、何ら事件らしい事件もないので、ストーリーは淡々と進行し抑揚にも欠けている。以上より、本テキストは口承でありながらも、実際はむしろ談話に近いものであるともいえる。

四 構造分析

まず、前節のあらすじ内の「A↓」と「↑A」に挟まれた範囲を「A」と呼ぶ。同様に、「B↓」と「↑B」で挟まれた範囲を「B」、「C↓」と「↑C」で挟まれた範囲を「C」、「D↓」と「↑D」に挟まれた範囲を「D」と呼ぶことにする。

「A」には、私と妻が裕福であるが子どもがいないこと、カラスの神様におすそ分けをしたこと、カラスの神様が私に対して狩りの恩恵と息子・娘たちが与えることの祝福をしたことが描かれている。続く「B」には、子どもたちの誕生と、息子たちが大きく成長し立派になったこと

が述べられている。「C」では、娘たちが大きく成長し立派になったことが述べられている。最後の「D」には、私と妻が年老いたがいっそう裕福であること、息子たちが結婚したこと、カラスの神様がいつまでも見守ってくれると言ったことを根拠に、息子たちや娘たちにかかるカラスの神様へのおすそ分けを継承したこと、孫たちが大勢できたことが述べられている。

以上をふまえ図式化を試みてみることにする。

「A」…カラスの神様との契約開始(親)

「B」…息子たちの成長

「C」…娘たちの成長

「D」…カラスの神様との契約の継承(子)

「A」と「D」はともに「カラスの神様との契約」がテーマである。「A」では「私」個人が契約を交わすのであるが、「D」では、子どもに契約が継承されている。かつ、「A」において「個人」で開始された祭祀が「D」では「個人」が否定され、祭祀は子どもへと継承されることになる。⁽⁴⁾同時に、「私」の人生は終局を迎えることになる。つまり、「A」と「D」は祭祀がテーマであるが、祭祀をおこなう立場は親と子どもである。続いて、「B」と「C」についてである。「B」と「C」の双方は「子どもたちの成長」がテーマである。ここで、「B」で注目しているのは「息子たち」であるが「C」では「娘たち」である。したがって、当該テキストは、テーマの配置順における外形上の対称性(対照性ではない)により構成されているので、キアスムスであることを示している。さらに、「A」と「D」はテーマが同一であるが、祭祀を実施する人物は「親」と「子」で異なる。一方の「B」と「C」もやはり同一

のテーマを扱っているが、注目する対象が「息子たち」と「娘たち」であり異なっている。ここで、「親」と「子」、「息子たち」と「娘たち」は、双方ともに対照的な関係であるといえる。よって、テキストは裏返し構造でもある。

五 おわりに

本テキストでは、アイヌ話者である白沢ナベのウエベケレ「カラスの恩返し」を、裏返し構造の観点から分析した。その結果、テキストは、合計二組の要素対により構成された裏返し構造からなることがまとめられた。本テキストは異郷訪問譚ではない。したがって、因子①の前提が欠落したテキストであるといえる。裏返し構造が表出する因子が、因子①および因子②であるという本稿の仮定にもとづけば、本テキストに当該構造が現れた理由は因子②によるものである。以上より、本稿の知見はアイヌテキストに裏返し構造が表出する理由が、アイヌ民族における対照性を好む心性にもとづいていることの蓋然性の高さを支持する。同時に、以上は、アイヌにおける対照性を好む心性に起因する可能性を示唆するものである。⁽⁵⁾

引用文献

大木富、二〇二三、「ウラジミル・ナボコフの『ロリータ』における「999から1000への移行」のモチーフと数のキアスムス」『異文化の諸相』、四三巻、一号、五七―七四、日本英語文化学会。
大喜多紀明、二〇一六、「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造…異郷訪問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』、一四号、四五―七二、北海道言語研究会。
大喜多紀明、二〇一八、「芥川龍之介『トロッコ』の裏返し構造…良平の「新生場面」の機能」『国語論集』、一五号、四五―五二、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室。

大喜多紀明、二〇二三、「新約聖書「ガラテヤ人への手紙」における裏返し構造…Bibleのキアスムス構造を前提として」『人間生活文化研究』、三三三号、五六―一五七四、大妻女子大学人間生活文化研究所。
大林太良、一九七九、「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、二号、一一九、日本口承文芸学会。

菅泰雄、一九九四、「アイヌ語話者の日本語北海道方言談話資料」『北海学園大学人文論集』、二号、四五―八五、北海学園大学。

田村すず子、一九九六、「SPON KAMUYKKAR 小さい神謡（掛け合い歌、口くらべ）」(10) konru ka ra 氷の上で 貝沢こきん『アイヌ語音声資料選集…韻文篇』、四八―五一、早稲田大学語学教育研究所。

知里真志保、一九八一、「アイヌ民譚集―えぞおけ列伝・付」、岩波文庫。

中川裕、二〇二二、「アイヌ口承文芸テキスト集21…白沢ナベ口述ウエベケレ…カラスの恩返し」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』、二四号、三二七―三四〇、千葉大学ユーラシア言語文化論講座。

松村一男、二〇二〇、「三つの構造…キアスムス、プロップ、レヴィーリストロース」『表現学部紀要』、二〇巻、七九―九八、和光大学表現学部。

村崎恭子、一九九九、「浅井タケ昔話全集Ⅰ・Ⅱ、横浜国立大学、http://www.aatufsc.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asa01.html」（二〇二四年一月六日閲覧）。

依田千百子、一九八二、「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、五号、四七―五七、日本口承文芸学会。

注

- (1) 中川（二〇二二）によれば、白沢の戸籍上の誕生年は一九〇五年ではなく一九〇六年である。
- (2) 図表中の図形は便宜上のものである。
- (3) 聖書テキストにおいても同様の性質がみとめられるのだが、本稿ではこれに言及しないことにする。
- (4) 採録者の中川は、この物語のポイントの一つが、「子供ができないことになっっている者」である主人公が、カラスを祀ったことによって、子供に恵まれ、幸せな人生を送ることになるという点」（中川二〇二二、三二九）であると述べた。〔A〕での恩恵の付与に対する判断は「カラスの神様」である

が、「D」の判断は「私」であり、それを「カラスの神様」が追認している。
(5) 無論、白沢の心性をアイヌのそれとして安易に一般化することはできない。
筆者としては、白沢以外を話者とするテキストについても同様の検証をおこなうつもりである。

雑報

月例談話会

日時 毎月第三日曜日、午後一四時～一六時三〇分に、月例談話会を行っています。参加ご希望の方はお申し込みください。会場等をお知らせします。

内容 事前に発表者と発表内容を決めず、当日の参加者のうちの希望者が発表しています。情報交換や相談の場としても利用されています。

申込み方法 会誌『西郊民俗』末尾に記載の連絡係のメールアドレスにEメールでお送りください。郵便の場合は、連絡担当の住所あてにお送りください。

会場 東京都内貸会議室(例、JR飯田橋駅付近)。今後、変更の可能性もあります。会場費をいただきます。

会のホームページをご覧ください。変更等、逐次ご確認願います。

第八四七回 令和六年六月一六日(於…飯田橋)

若狭の晴明伝承

祓と上巳、端午、七夕

福井県の「小鍛冶」伝承とその周辺

劉卜子『曆略註』をめぐる諸問題

埼玉・東京の蛇

小池 淳一

史 乃琛

林 京子

馬場真理子

榎本 直樹

第八四八回 令和六年七月二一日(於…飯田橋)

お盆の火 近況報告(青森県)

福井県福井市一乗谷瀧殿権現社とその周辺

上巳、端午、七夕の節供における植物の役割

東方朔の写本三種―書写の過程に注目して―

籾の長期保存、一時保管のための設備と用具

増田 公寧

林 京子

史 乃琛

小池 淳一

榎本 直樹

第八四九回 令和六年八月一八日(於…飯田橋)

日月食と月の光の伝承

山袴式モンベと戦時下のズボン式モンベ

―明治末期・昭和初期の奥会津『伊北村』郷土誌』から―

久野 俊彦

佐野市「孫太郎稲荷」の「孫太郎稲荷神社御神徳並御沿革」について

林 京子

里修験と神仏分離

榎本 直樹

『西郊民俗』バックナンバーのPDF掲載

ホームページに会誌『西郊民俗』PDFの掲載を始めました。『西郊民俗』バックナンバーのページで、該当号の「PDF」をクリックすると、表示されます。第二五八号から掲載を始めます。会誌刊行の一年後に順次掲載します。著作権は執筆者に帰属します。個人の研究目的の範囲でご利用ください。

問い合わせ先

連絡担当（会誌送付・入退会・談話会等）

榎本直樹 〒350-1123 埼玉県川越市脇田本町二六〇六

ドルチェ川越四〇九

Eメール inari@ceresoon.ne.jp

編集担当（原稿送り先） 投稿案内は表紙見返しに掲載

久野俊彦 〒329-0433 栃木県下野市緑四一六〇七

Eメール hto4sano@yahoo.co.jp

西郊民俗 第二六八号

令和六年（二〇二四）九月十五日

〒一一二一〇〇五

東京都文京区水道二―三―一五―四〇三 小池方

西郊民俗談話会

振替口座 〇〇一八〇―二―八九四四〇